

「辰巳ダムが出来ていたら、浅野川洪水を防げた！」ではなく、逆に「浅野川洪水は、辰巳ダムが引き起こした災害だ！」

●犀川は十分すぎるほどの余裕があった！

平成20年7月28日浅野川洪水では、浅野川上流周辺ばかりではなく、犀川上流でも豪雨が発生した。そのため、犀川大橋地点（下菊橋測水所）で過去30年間の流量観測史上最大流量毎秒433立方メートルを記録した。この出水は記録的であったが、犀川の流下能力（中流部）毎秒1230立方メートルの35%にしかすぎなかった。浅野川の洪水をより多く受け入れる余裕があり、辰巳ダムを造って犀川的能力を大きくしなければならぬ理由はなかった。また、既存2ダムの治水ダム容量はほぼ空で、空き容量は辰巳ダムの1.7倍もあった。

●並木町の氾濫は、浅野川放水路という切り札を切り損なったため！（管理不備）

浅野川放水路は、55年前の氾濫を契機として、浅野川の洪水氾濫を防ぐために計画され、昭和49年、いまから35年も前に完成している。浅野川の洪水の一部を犀川へ流すことができる。今度の洪水では、石川県は浅野川放水路を通じて犀川へ毎秒150立方メートル以上の放流をしたと主張しているが、観測流量の記録から求めた流量は毎秒約90立方メートルにすぎない。分流ゲートが想定よりも下がっていたこと、堆積土砂が入口を塞いでいたことなどの理由で放流が妨げられた。適正な管理がされていれば毎秒140立方メートルの流量を流すことができたはずであり、毎秒50立方メートルの流量を流し損なった勘定になる。もし、これが正常に犀川へ流されていたならば、当日の浅野川大橋上流「切り欠き部」からの洪水氾濫はなく、並木町の浸水被害はほとんどなかっただろう。

●昌永町の氾濫は、浅野川放水路という切り札を切り損なったため！（ゲートを全開していなかった）

昌永町の氾濫は、川底に大量の土砂が堆積していたことなどの原因もあるが、浅野川放水路の機能がフルに発揮できておれば、かなり小さい被害にとどまったであろう。その切り札が現在、ゲートの一部を下ろして放流の制限をしている。制限の理由は、犀川下流部の整備が進んでいないからである。昭和54年にスタートした河川改修が30年経った現在も終わっていない。石川県が注力して整備を進めていたならば20年間くらいで完了していたはずで、平成10年頃、10年ほど前には整備が終了し、浅野川放水路のゲートも全開され、フルに機能していたはずである。全開であったならば、今回の洪水で浅野川放水路を通じて毎秒180立方メートル程度、犀川へ放流されたはずである。その結果、今回の洪水では毎秒90立方メートル程度低減できたと推定され、昌永町の氾濫はかなり軽減できたはずである。

●想定内の洪水であり、浅野川放水路という「切り札」で氾濫を回避できた！

石川県河川課は200年に1回程度発生する豪雨であったと説明するが、その豪雨によって発生した洪水自体はそれほど大きくはない。浅野川放水路の起点、田上地点での観測記録は毎秒448立方メートルであり、100年確率規模の毎秒615立方メートルよりも小さく、数十年規模の洪水である。想定内の洪水である。浅野川の治水は、100年確率の規模の洪水に耐えられるようにほぼ完成していたのであるから、浅野川放水路による切り札によって回避できたはずである。

●「辰巳ダムが出来ていたら、浅野川洪水を防げた！」というのは、行政の河川整備怠慢を湖塗する言い訳だ！

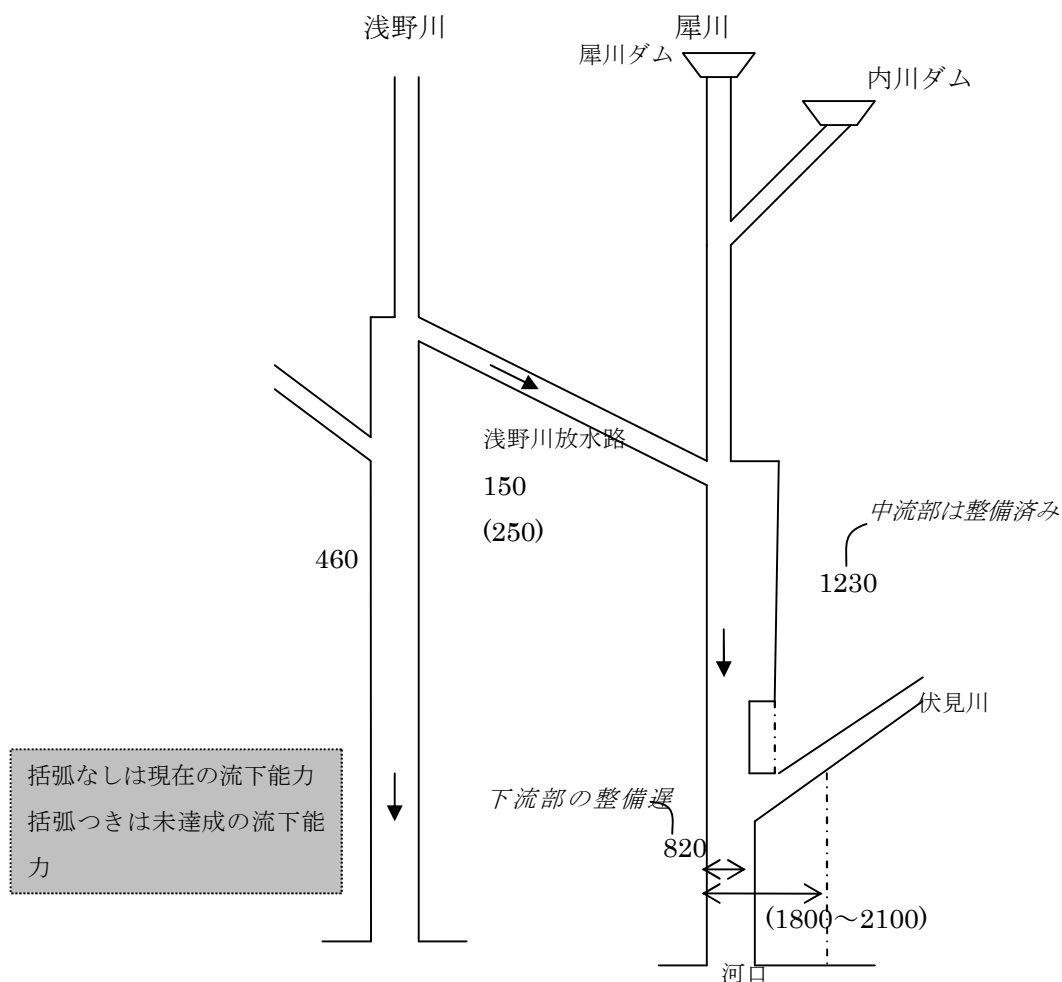
浅野川洪水以後、知事以下関係者は、「浅野川と犀川の治水の一体的な整備」を強調し、辰巳ダム建設の遅れが主たる原因であるかのように説明している。これはまったくの誤りである。「浅野川と犀川の治水の一体的な整備」は、昭和42年度から昭和49年度に実施された第二次犀川総合開発事業（浅野川の洪水の一部を犀川に負担させ、犀川の負担を受け持つために内川ダムが造られた。内川ダムと浅野川放水路がセット。）のことであり、辰巳ダムとは無関係である。犀川中流部および下流部の整備が完了すれば、浅野川放水路のゲートが全開され、浅

野川治水が完成したはずであり、「辰巳ダム」の影も形もない。辰巳ダムは、昭和 50 年以降、さらなる犀川の能力拡張のために企画されたもので、浅野川の治水とは無関係である。犀川下流部の河川改修が遅延しているうちに、辰巳ダム建設促進者や関係者が便乗した。「辰巳ダムが出来ていたら、浅野川洪水を防げた！」というのは、行政の河川整備怠慢を湖塗する言い訳だ！

●逆に、浅野川洪水は辰巳ダムが引き起こした災害だ！

前述したように、犀川下流部の整備が完了していたならば、浅野川放水路も全開され、浅野川洪水の氾濫被害はほとんどなかっただろう。石川県は昭和 49 年に辰巳ダムの可能性調査に着手して依頼、辰巳ダムに拘泥してきた。この間、犀川下流の河川改修に注力しなかった。犀川下流部は、第二室戸台風の災害復旧で達成された、昭和 40 年頃の治水整備水準にとどまり、約半世紀にわたり、整備水準の停滞があった。そのため、浅野川放水路を全開する機会を逸し、今回の浅野川洪水を引き起こす事態となったのである。辰巳ダムが無ければ、犀川の治水整備水準の向上のために下流部の整備に注力せざるをえず、少なくとも 10 年ほど前には放水路の全開もなされ、浅野川洪水も回避できただろう！

【別添】 浅野川放水路の分流制限を解除できないのは犀川下流の整備が遅れているからである。現在の整備水準を模式化するとつぎのようになる。



犀川下流部(伏見川合流点から河口)の河道能力は、中流部(犀川大橋前後)の 1230m³/秒に対して、820m³/秒しかない。整備目標値は 1900~2100m³/秒である。河川整備は下流から実施することが原則である。中流を整備して能力を高めても下流が整備されていなければ流すことができないからである。この原則がおろそかにしたことで、上・中流で整備した施設を十分に活かすことができなかった。

現在の犀川の治水整備を住宅に例えると、肝心の大黒柱が半分欠けている欠陥住宅である！